

## ◎勝利の経典『御書』に学ぶ 崇峻天皇御書

「心の財第一なり」（御書全集 1173 ページ・御書新版 1596 ページ）

「心の財をつませ給うべし」（同）

この一節は、日蓮大聖人が、苦境のさなかにいる門下・四条金吾に贈られた、勝利への最大の指針です。

「心」こそ、人生の最高の「財宝」です。それは、「心」の中に、偉大な可能性と無上の尊極性が具わっているからです。

「心」は、いくらでも広がります。また、いくらでも深められます。そして、いくらでも強くなります。

（中略）

人生をよりよく生きるために、内なる心の世界をどう広げゆくか。いかに心を鍛え、「心の財」を積んでいくか。

そのために妙法があるのです。

（『勝利の経典「御書」に学ぶ 4』77～78 ページ）

「心の財」を根本とした時に、実は「蔵の財」も、「身の財」もその真実の価値を正しく発揮することができるのです。

一言で言えば、「心の財を築く」という人生の根本目的が大事です。この根本目的を喪失してしまえば、たとえ「蔵の財」や「身の財」をもっていようとも、それらへの執着が生ずる。それは失うことへの不安ともなり、かえって苦しみの因となる。

あくまで大事なものは、「心の財」を積み上げていくことです。ここに正しい人生の目的観があります。

（『勝利の経典「御書」に学ぶ 4』98 ページ）

## ◎人間革命の宗教

私自身、戸田先生の事業の苦境を支えながら、青年部の班長のときも、学会のことは全部、わが使命であると捉え、「どうすれば一番、広宣流布が進むのか」を悩み、考え、祈り、戦いました。

「戸田先生ならどうされるだろうか」と、広宣流布の大將軍である先生の不二の弟子として、大田や文京、大阪、山口、荒川、葛飾などで万事に対処していきました。

海外の地を訪問した時も、「私の存在そのものが創価学会だ。『アイ・アム・ザ・ソウカガツカイ』でいこう！」と、人々と胸襟を開いて対話に走ってきたのです。

世界広布新時代が大きく進みゆく今この時に、各国・各地の若人が「私が創価学会である！」との気概で立ち上がってくれている。この創価の青年の存在こそが、「地球の未来の柱」ではないでしょうか。

（『人間革命の宗教』67～68 ページ）